



理事会だより (3・14)

臨時総会

次期会長に村場十五氏を承認、会則8条の副会長2名を副会長若干名へとする改正案を全会一致で決定。池田現会長の退任、村場新会長の就任の挨拶があった。

理事会

一、桜まつり俳句大会につき、梅まつり俳句大会と近接していることの投句および事務の負担感等から、主催の小田原市観光協会に取りやめを打診した結果了承を得られたことをうけ、七年四月以降非実施との提案があり審議の結果了承された。

二、第77回桜まつり俳句大会につき、投句一六三名

五六二句、当日参加見込み七〇名と報告(事業部)。

当日の役割分担を決定(総務部)。

三、四月二五日の定期総会の招集通知を発信。総会議案書案が配布され四月理事会にて検討(総務部)。

四、立春句会、梅まつり俳句大会の会計報告(会計部)。

「俳句おだわら」10句抄(679号より)

加藤かほる 抄出

年用意空も拭かんと窓を拭く
虚飾なき寒林一樹威をなして
数へ日や一晩水に漬けし豆

川尻の水の澱や葦枯るる

居酒屋の仕切り一枚腰障子

阿亀蕎麦食うて掘割梅早し

丹沢は刃物持ちけり北風

ガソリンはあと一目盛り雪女

葉湯に浸る冬夜の風の音

一月のだだをこねてる修正液

陌間みどり 抄出

子と作る聖菓に降らす粉砂糖

毛糸編む初めての子につきつきり

その沖を客船の航く懸大根

冬草の青し下校の子らの声

茶が咲いて昨日と同じ今日がある

奥の院訪う近道の実千両

勢ひ良き髭を選りたり達磨市

葉草を煎じる匂ひ雪催

菩提寺に子等六人の初写真

葉湯に浸る冬夜の風の音

門松 鳳文

秋山 昇

中田 笑子

芹澤 常子

高橋千代子

鳥海 壮六

石井 秀稀

島 梅乃

山田 照子

小澤 園子

肥後ちさこ

関戸わよこ

池田 忠山

星 一義

瀬戸 悠

斉藤 静

瀬戸 りん

米山 翠

木村 幸枝

山田 照子

会長退任ご挨拶

池田 忠山

令和二年四月に会長に就任してから今日までの四年間は瞬く間だったとの思いでいっぱいです。

就任直後の令和二年度の桜まつり俳句大会の中止を皮切りに、三年間はコロナ禍に振りまわされどおでした。

その中で特筆すべきは、当協会の宝ともいふべき「協会報」の灯が灯され続けたことで、それにより、当協会全体の灯が消えずに済みました。

そして遂にこの一年、会員及び副会長、部長をはじめとする理事の皆さんのお蔭で日常性を取り戻し、次にバトンタッチすることができました。

会員の減少に歯止めがかからない課題が残りますが、これからも一会員として、少しでもお手伝いできればと存じます。

四年間ご指導ご鞭撻、誠に有難うございました。

令和五年度年間ベスト一句集鑑賞

(一句鑑賞のほか二句抄出)

戦禍尚しづかに灯る聖樹かな 杉本 久子

「尚」の言葉が重い。「戦禍」に相反するような「しづか」が続く。確かに報道されていた聖樹は樹の緑と、電飾の青と白のみの色。静かな色だった。街は瓦礫の山。そんな中でも人々はクリスマススを祝い、祈っていた。浮かれてはいなかった。「しづかに灯る聖樹」が人々の姿を代弁しているかのように頂戴した。この原稿を書いている今は二月。二年が過ぎてしまった。

夕虹や明日また使ふ鍬洗ひ 古屋 徳男
濃く淡く刻の流れる藤の下 石井千代子

(石井きよ子)

つつがなき一日ありて汗を拭く 中根登美子
一日くの大切さを身にしみて感じました。つつがなきがこの句を最上にくれたと思います。作者のきめ細かな表現に感服しています。汗を拭くがピシッときめています。

船頭の太き二の腕風光る 門松 鳳文
深秋の静かに閉づる絵本かな 池田 令子

(尾崎幸子)

会長就任にあたって

村場 十五

このたび小田原俳句協会六代目の会長を拝命いたしました。いままでの会長の皆様方に比して俳人としても組織運営者としても非力、未熟であります。七十年を超える伝統ある俳句協会の会長に指名いただきましたことを光榮に感じております。佃会長、池田会長時代に理事として事業部長、広報部長を担当した経験を生かして務めたいと存じます。

俳句は「物事を観察し、歳時記や辞書をひく、十七音の文字を紡ぐ、声に出して読む、句会で仲間と楽しむ」という一連の素晴らしい文化であり、年齢に関係なく楽しめるものです。当協会は高齢化に伴い会員減の波を受けておりますが、俳句のこのような良さ、楽しさを多くの同好の皆様と共有して広げていきたいと思います。これからも引き続き毎月の協会報や俳句大会を通して会員や同好の方々のお役にたてればと思います。

会員、理事の皆様のご支援ご指導をよろしくお願い申し上げます。

鮎跳ねて光を撥ねて水刃ねて

新井たか志

うらうらとよく晴れた日の鮎釣りの景が浮かびます。「はねる」という同じ読み方ではあるが、それぞれ違う意味の漢字を使ったことに魅力を感じました。「鮎が飛び上がる」「光を払い上げる」「水を切り落す」鮎の躍動感が伝わります。リズム感があり、景もはっきり見えます。助詞「て」を重ねて使ったことにより、一層のリズム感が出たと思いました。

言へないこと言へて白菜真二つ

小林永以子

子供等が風になったよ芒原

中村 昌男

(伊藤はる子)

ときに鬼女ときに仏や曼珠沙華

市川めぐみ

曼珠沙華。不吉な異名もある彼岸花。各地の名所は賑わい、園芸種も出回っている。お経にも登場する花形は繊細で美しい。でも毒があると教えられたあの紅色は少し怖い。さて、貴方は曼珠沙華好きですか嫌いですか。ネット診断「あなたは仏なのか鬼なのか」で私は「ガチ仏・仏度100%」と出た。思わず苦笑。さて、これをどう捉えて良いのやら。

言ひたき事其々海月発光す

瀬戸 りん

うららかや子の手開けばだんご虫

陌間みどり

(菅野英余)

鮎跳ねて光を撥ねて水刎ねて

新井たか志

六月一日に解禁される鮎釣。この句は鮎を釣り上げたその一瞬を丁寧に描写している。釣り糸の先に尾鰭を上を丸めて跳ねる鮎。同時に鮎がキラリと光る様を、光を撥ねると表現。そして、水刎ねての刎ねるは、水を断ち死を意味する。同じ音の「はねる」に、跳、撥、刎の意味の違う字をあてることにより、十七音で見事に表現されている。また、俳句のリズムをととても大事にされている。

言へないこと言へて白菜真二つ
非通知の電話はつとく蓬餅

小林永以子
高橋千代子

下流へと月の堤の歩を返す

佐宗 欣二

崇高な一句。凡才が語ることばを持たない一句である。月も堤も川瀬のさざ波も、とりまくすべてが美しいこの夜に作者は自身の歳月をふり返る。決して容易い道程ではなかった。だが美しきもの正しきものに愛された日々でもあった。今思えば悔いはない。だからもう上流を目指すのはやめる。背筋を正したその姿に月光は周くふりそそぐのだ。

湯屋ひとつ芒明りの峠道
蜜柑山日の出の色を貰ひけり

宮崎 悦女
柏木 良花

(須田聡子)

ときに鬼女ときに仏や曼珠沙華

市川めぐみ

少子化と叫ばれながら虐待が減らない社会現象、仏の気持ちになつて子供を育ててほしいという思いでいっぱいです。そうは言いながらも能登地震で被災された人々の事を思うと、国会議員には正義はないのかと怒り心頭で鬼女化してしまふ自分に腹立たしくもなります。女は鬼にも仏にもというフレーズが、真紅の色が妖しい。曼珠沙華の季語が良く合っていると思います。

言へないこと言へて白菜真二つ
ガンジーになる途中なり干大根

小林永以子
田畑ヒロ子

(佐藤正子)

鮎跳ねて光を撥ねて水刎ねて

新井たか志

六月が近づくと、太公望はそわそわし始める。六月一日未明、解禁を待つて酒匂川に繰り出す。ぴんと一跳ねして上がって来る鮎。「光を撥ねて水刎ねて」とリズムよく畳みかける表現で、六月の瑞々しい光や水鮎の命の輝きを余すところなく表し、六月の風や香魚といわれる鮎の匂いも感じさせる。きらめきに満ちた爽やかで気持ちのいい句である。

雁の群発つ森々とあさぼらけ
まぶしさはさびしさに似て花野径

中山智津子
山田 照子

(瀬戸りん)

移り住みし何処も故郷卒寿春 井上 和子

九十才の春を迎え、何処に住んでも、住んだところが故郷と詠まれた和子さま。人生を和やかに全うする極意はこれだ・・・、と私は感動しました。令和5年6月協会報の「草むら」の句友佐々木重満氏の和子さま追悼文を読み返しました。気配り上手、皆様から信頼され多彩・・・口癖は「幸せ、感謝」だったと。夭たる卒寿春を迎えられ、しなやかなお心の和子さまにひと目お会いしたかった。佳句です。

鮎跳ねて光を撥ねて水匆ねて

今はもうひとり花野を夢の中

新井たか志
神野美代子
(田中幸子)

それぞれの部屋にそれぞれ夜長かな 加藤かほる

夏の暑さも終り、九月中頃ともなれば心地よき涼風に秋の気配を感じます。家族でにぎやかに夕食をすませた後の時間。秋の「夜長」は、ゆったりと好きなことをして落ち着けます。もうこんな時間と寝そびれてしまうこともありがちです。この句には、家族それぞれが秋の「夜長」を楽しむひと時が感じられます。

文豪の旧居あかるし鴟の声
夕虹や明日また使ふ鍬洗ひ

植松テル子
古屋 徳男
(吉田百代)

イテウオンの若き命は雪となる 穂坂志げる

二〇二二年十月、ハロウィーンの夜に起きた韓国ソウルの繁華街（イテウオン）の雑踏事故、報道によれば日本人二人を含む一五六人もの尊い命を亡くした。まさに阿鼻叫喚と言える現場の状況に胸が痛む。さて掲句、若き命は雪となるの惜辞は将来ある若者に絞り揺るぎない鎮魂歌となった。又、古来花、月と共に代表的な景物とされる「雪」の選択が儚なさの中に切なさを増幅している。

シャガールの人飛んでいる大花野

山水を掬ふ手柄杓山法師

大石 和子
米山 翠
(長谷川きよ志)

諍ひは苦し秋刀魚の腸旨し

秋刀魚の腸は子供の頃は食べられなかった。年を重ねると苦いが旨い。大人の味だ。一方彼方此方の諍いを苦々しく思っている。始めるのは易しいが終る事の難しさ。一日で早く平和が訪れますように願う。取り合せ絶妙に共感します。

黄泉などに紛れこむなよ赤とんぼ
ガンジーになる途中なり干大根

内田知江子
田畑ヒロ子
(山田 照子)

俳句おだわら (3・19メ切り、到着順)

◆小田原鹿火屋 (2・16) 久江報

麦踏みの背負ふ光の一行詩 足立 和子

春の雪紅茶の香り漂ひぬ 川本 育子

大玻璃戸磨きて春を待つところ 高橋 小糸

春浅き川面にゆらく雲の影 山崎 悦子

城の梅光の芯となりにつけり 近藤 久江

◆香雨・梅ごち (2・25) 忠山報

春めくやゆるゆる伸びて亀の首 肥後ちさこ

春眠や寝返るたびに夢違へ 関戸わよこ

春めくや歩けば靴の軽くなり 青山 典子

風を切り風と戯る風車 門松 鳳文

制服の少し大きめ新人生 吉田 百代

目のなれてまた見つけるたる路の臺 吉田 康雄

雛飾りつつほゝゑみのおのづから 陌間みどり

あたたかや歩数のふゆる万歩計 小澤 純子

湾岸へ向かふゴンドラ風光る 池田 忠山

◆こよろぎ (3・14) つとむ報

下曽我や流鏑馬を押す梅の風 高杉掘三朗

梅の香や一人散歩の歩数計 板谷 雅泉

近径はぬかるみばかり一の午 植松テル子
忘れても都忘れの咲きにけり 神山つとむ

◆山北 (2・22) 由里子報

漬物を手窪にもらう梅日和 和田恵美子

リハビリ師の大きな背中豆を撒く 尾崎 幸子

満身に春の陽あびる足湯かな 星 一義

春の雨獸の走るトタン屋根 石田加津子

満作や真珠の連を拭ひをり 竹下由里子

◆たけのこ (3・9) 悦女報

梅園の真赤な枝垂れ姫の如 三木 泰子

折紙をひとり静かに春の宵 徳田 公子

残雪の足湯に憩ふ箱根宿 久津間百合子

青春を引き寄せてくる春の潮 小宮 早苗

種袋振って確かむ土の声 宮崎 悦女

◆春野 (2・25) きよ志報

夢つなぎ命つなぎて日記買ふ 秋山 昇

口ぐせは「きらひ」「きらひ」や入園す 伊藤はる子

飛び入りの唄に喝采春祭 内田知江子

つちふるや伝へ聞く魏志倭人伝 尾崎 一夫

人類に闘争本能牡丹に芽 瀬戸 悠

古草や無理をせよとは言はぬ世に 二見 和江

引き潮のやうに人去る夜の焚火 長谷川きよ志

◆沈丁(3・7)

寶子山報

春雷やざんばら髪のまま睡る

若村 京子

ひも解かれ仲睦まじき親王雛

柳澤ミサ子

倒壊の家を出でます加賀雛

田中 恵一

老舗なるあれやこれやの夫婦雛

河本 純子

ミモザ咲く白髪はヘナへ染まり行く

瀧本 敦子

雛飾る自分時間のたつぷりと

勝木 澄子

技ありのパパの散髪四月来る

菅野 英余

ほんのりと遺影の下の雛の灯や

高井 幸子

やはらかき髪のおそびや春の風

片野 節子

亡妻の雛孫膝上で祝ふ膳

峯尾ユキエ

紙雛のまがりし口よあかんべえ

清水美代子

髪形を変えてしまおう初桜

松下 俊之

つくし揚げる青空市のおもてなし

武居裕美子

全集の前に立たせる小芥子雛

寶子山京子

◆みなみ(2・17)

かほる報

吊橋を春風が抜け人が抜け

市川めぐみ

うぐいすや森の日時計動き出す

豊田 幸枝

鶯や娘の手を借りる一日旅

斉藤 静

薄氷を知るか知らぬか鯉泳ぐ

小瀬村信子

急ぎ割れば黄身二つあり春の朝

柳川 紀枝

立春の光を廻すサイクリング

加藤 富江

眠気誘う未完の一句春炬燵

加藤れい子

薄氷の岸辺の草を離れけり

加藤 健治

黄水仙小さな童話生まれそう

加藤かほる

◆青梅(3・13)

幸子報

花の宴笑顔に誘はれ酒を汲む

大塚 行人

花粉症裸電球ぼやけをり

湯本とし子

春昼や深閑とある村役場

加藤まり子

春光に背を伸ばして歛仕事

久保寺トミ子

青き踏む風になりたい里日和

田中 幸子

◆実のり(3・13)

たか志報

奉納のわらべの舞や花の雨

荒井ちゑ子

卒業式涙にくれた日想う

岩本ひさみ

梅日和博物館の埴輪の目

杉本 久子

うさぎ小屋終の餌やり卒業す

木村 幸枝

春昼や式歌の稽古らしき窓

新井たか志

◆おほる(3・13)

きよ子報

蒲公英や着地は未来綿毛飛ぶ

廣田 悦子

水温み手指生き生き厨の朝

二上 光子

待つ人の軒へ千里を初燕

横塚 昌平

すれちがう風の私語聞き青き踏む

水温む白線川を流れ行く

四季の里花咲いて散り季惜しむ

啓蟄や選んでみたき我が出自

山里に色をこぼして水温む

春兆す五指の動きの軽きかな

天辺に風の道あり豆の花

里山も箱根も庭と涅槃西風

水温む恩師と巡る自然園

移ろいの季を知らせて初音かな

◆鷹(3・2)

挨拶をすませ子猫の機嫌とる

豆撒きの名残掃き寄せ早出せり

一鉢に和む旦暮よさくら草

鬼打の豆ぞきじ鳩食べに来よ

春立つや海風香る媽祖の廟

かはらけ投げに鈍き餅や山笑ふ

浦風や玉垣抜くる恋の猫

寒明の水に浸せる硯かな

春泥や長続きせぬ店の跡

万屋の奥行深き余寒かな

石井千代子

小野 菊土

香川 花子

加藤 春江

瀬戸とみ子

高橋みどり

中根登美子

中村 昌男

中津川晴江

石井きよ子

十五報

青木 孝子

池田 令子

西賀 久實

佐宗 欣二

須田 晴美

中田 笑子

百川 秀子

山崎美知子

柏木 良花

庄司 下載

コスメ選る新大久保や春の風

風入れて明日の客間や梅の花

鳥雲に入るや投網のさざれなみ

曲屋の矮鶏のつきくる麿出し

前山の芽立ち促す鳥語なり

図書館に一番乗りや初桜

草餅や歩ききつたる石畳

差掛けの割木の嵩や春近し

連翹や更のキャラコの割烹着

豊乳をふふむ赤子や百千鳥

双体の道祖神在り名草の芽

しわくちやの母の笑顔や花菜風

曇天を映す水面や入彼岸

輝きて向こう家よりの石鹼玉

葉一枚古池に浮く日永かな

うららかや犬のリードの萌葱色

若蘆や魚閃きて川碧し

父と選ぶ電気スタンド新人生

振り向くと近しき山や花の雲

畑中にソーラーパネル蝶生る

青き踏む雲の形のさだまらず

瀬戸 りん

高橋久美子

中山智津子

齊藤 桂

芹澤 常子

深澤 一華

大木 敬子

大島美恵子

田下 昌人

中根 和子

加藤 幾代

高橋千代子

守屋 まち

米山 翠

來田 新子

青山 典仁

小林 環

澁谷 明子

下平 美子

鳥海 壮六

古屋 徳男

初任地の様変わりして陽炎へり

村場 十五

◆草むら(3・18)

重満報

春一番楽しき舞台開幕す

石井 秀稀

寝ておれば命の芯へ油蟬

佃 悦夫

出生率低下の一途初音かな

佐々木重満

◆零(3・21)

史郎報

義理チヨコと言えどもしばしあたたかし

青木たけを

釘屋へ駆けこむ少女春一番

伊藤 道郎

群れる公魚楽しそう岸には寄るな

川合 昌子

日永しや手縫い雑巾鼻眼鏡

佐藤 正子

みなもとの道訪ねたや春の川

中村 裕子

春一番蝶の天敵通り抜け

野川木一路

能登大隆起海女が海を探してる

岡本 史郎

◆無所属

稜線の奥は明るき春薄暑

小林永以子

百色の口紅ならぶ春の雨

畠 梅乃

時雨るるや開店遅き古本屋

一ノ瀬茂代

日脚伸ぶ一人で祝う誕生日

田代 孝子

春光を散らして鳥飛び立てり

出澤 洋子

背なの子よ早く解けるよ山の雪

蓑宮 わか

杉花粉大寺を越え村を飲み

岩楯恵津子

ただ一つ緑なす星草萌ゆる

須田 聡子

甦れ能登の山河よ鳥雲に

北村 文江

春セロリパシユツと音のうすみどり

田畑ヒロ子

ニセモノの国家ニセモノの桜かな

瀬戸 正洋

群れ翔ちて天に落書鳥帰る

小澤 園子

枇杷の花隣も前も独り者

山田 照子

春の虹まだ空つぽのランドセル

岡田 典代

春の雷轟(ひびき)力士の一勝一敗

神野美代子

木漏れ日をつつく雀や寒の入り

穂坂志げる

春雷や地雷と蜜のバンクシー

山本 すみ

時雨くる気配砂時計のくびれ

杉山あけみ

風光る上目遣ひのされかうべ

小島ノブヨシ

第二釘そつと机上に卒業す

大佐田うづき

ほーら芽が出てきた出てきたじゃがいもブギ

大石 雄介

風(とが)尖るタンポポ何も決まっていない

大石 和子

理事会日程 4/11 4/25 (定期総会)

5/9

(毎月第2木曜日 けやき15時より)

第七十五回神奈川民俳句大会
第十三回おおいゆめの里俳句大会

三月九日、於大井町そうわ会館。兼題は「水仙」「春」

(傍題可)で投句二八六組。当日席題は春季雑詠、

「踏青」。参加者四四名。

兼題入賞作品

神奈川県知事賞

水仙や海一望の流人墓

大井町長賞

春潮のころがしている貝の色

神奈川県議会議長賞

白もまた燃える色なり水仙花

大井町議会議長賞

歛先に春を呼び込む土の声

神奈川県教育委員会教育長賞

春描く最初の色を探しけり

大井町教育委員会教育長賞

機音に秩父の春の織り上る

大井町文団連会長賞

水仙花風脱ぐように開きけり

神奈川県現代俳句協会会長賞

手を握るだけの見舞や黄水仙

神奈川県俳句連盟会長賞

古の伊豆は流刑地野水仙

おほる俳句会会長賞

灯台は今も現役野水仙

(以下高点順)

水仙や子は新しき水に住む

重い荷を支え合い待つ能登の春

春シヨール老いには老いの洒落心

クレパスの彩を買い足し春を待つ

水仙のなだるる先の怒濤かな

看護師の載冠式や水仙花

水仙の寄り添ふ学徒遭難碑

水仙や兎らの座禅は地藏めく

字余りのやうな木洩れ日春の昼

水仙や仔牛見事に立上る

〔席題入選作品〕

神奈川県知事賞

蝶々も夕日も積んで猫車

神奈川県議会議長賞

日の匂ひ転がす水車春さざす

神奈川県教育委員会教育長賞

野良帰り三和土にこぼす春の泥

清水 吞舟

横塚 昌平

日高 朝代

豊田 幸枝

原 仁子

大澤 秀子

中村 秀子

陌間みどり

石井千代子

清水 吞舟

長島 久江

西岡 青波

奥村 ゑこ

松田ます子

大澤 秀子

田中 幸子

神奈川県俳句連盟会長賞

播粉木の音のさみどり木の芽和え

おほる俳句会会長賞

大阿蘇の起伏這ひ行く野火の舌

(以下得点順二十位迄)

踏青や芭蕉終生旅に住み

全身に大地の鼓動青き踏む

草の息足裏で聞いて青き踏む

花疲れ恋をしたふりされたふり

ミモザ咲く階段のぼるハイヒール

嬰の歩は月への一步青き踏む

阿夫利嶺の神への一步青き踏む

四季巡ることの幸せ青き踏む

あの雲なら乗れそうですね青き踏む

少年の夢は宇宙士青き踏む

踏青や社章の光る研修生

漂泊の夢を抱きて鳥雲に

落ちてなほ浄土のマドンナ紅椿

純白の富士は霊峰青き踏む

親からの五体すこやか青き踏む

田畑ヒロ子

清水 吞舟

横塚 昌平

日高 朝代

中村 昌男

大佐田うづき

石井千代子

小野 菊土

北村 文江

加藤かほる

尾崎 竹詩

鈴木 幸子

伊藤あつ子

長谷川昭放

菅沼とき子

須田 聡子

岡本 保

俳句おだわら鑑賞 (令和6年2月号)

大佐田うづき

諦めが老いを加速す日向ぼこ

加藤かほる

氣力、体力、美貌(?)、どれも日々衰えてゆく無念さ、不安。誰もがゆく道です。ふとウインドウの我身を見て、シヨックを受ける時が。ああ、五年前はこんなじゃなかったと思うなかれ、五年前には無かったものが。円熟、成熟、熟女! 今が食べごろ、老いは楽し!

須田晴美

年用意空も拭かんと窓を拭く

門松鳳文

掲句を読みそんな気持ちになった事があると共感した。中七の「空も拭かんと」に勢いがあり、壮快で愉快だ。日々の窓拭きも気分の良いものだが、新年を迎える準備ともなれば尚更だ。大きな窓であれば脚立に乗り背伸びをして拭いていく。大きな窓を大きな動作で拭いている作者の姿が浮かぶ。きれいな青空が広がっていたに違いない。

◆お詫びして訂正します 680号◆

3頁山田照子さんの句

(誤) 福だんご売る本丸の寒の朝

(正) 福だんご売る本丸の寒の明

城苑俳句・夏の部

(合同句集第十二集より近藤久江抄出)

桐の花明日が消える不安大

燕来て駅のホームをくぐり抜け

口内炎プチと一粒梅雨深む

ささやかな風にも応へ江戸風鈴

貴婦人のごとき灯台夏初め

蚊遣火や奥の書斎に山の風

ふるさとの門錆びぬ半夏生

じやり道の音を楽しむ夏帽子

鳶の輪の歪み左右に初夏の空

水無月の水に影置く至仏山

初夏や浜砂踏めばきゆつと鳴り

夏館午前0時の未来あり

庭の木もお寺の木々も蟬時雨

かたつむり旅ゆつたりと雨の中

産土の水の旨さや螢飛ぶ

梅雨深し籠る灯火の書淫の目

白日傘太平洋を入れにけり

どつしりと豪華客船梅雨港

葉桜やどこか虚ろな埴輪の目

土砂降りに韋駄天走り祭山車

更衣少女のまつ毛重たげに

山田 照子

山本 勝昭

湯本とし子

吉田 百代

吉田 康雄

米山 翠

若村 京子

和田恵美子

和田 瓊子

渡辺喜久枝

青木 勝子

青木 孝子

青木たけを

青山 典子

秋山 昇

足立 和子

新井たか志

新井 英子

飯田 愛

池田 忠山

池田 令子

見上げれば風にかそけき柿若葉

野も山も歓喜を唄う梅雨晴れ間

処方箋持って大暑の角曲がる

百日紅庄迫骨折山飛驒路

独り居の家庭菜園茄子トマト

恋失うごと風鈴をしまいけり

玉葱や相模ナンバー土ぼこり

指先に塩気の残る猛暑かな

人形のまたたきさうなはたた神

石井きよ子

石井千代子

石田加津子

石田 和代

板谷 雅泉

市川 恵子

市川 好子

一ノ瀬茂代

伊藤はる子

◆会則第8条の改正(令和六年三月十四日)

(現行) 本会に次の役員をおく。会長1名、副会

長2名、理事若干名、監査若干名。

(改正) 本会に次の役員をおく。会長1名、副会

長若干名、理事若干名、監査若干名。

☆寄付者ご芳名 ご協力ありがとうございます☆

池田忠山様

(参考条文掲載)

会則 第19条 本会の会計は会員の会費、補助金、

寄付金を以て充当する。但し、名譽

会長、顧問、名譽会員、百歳以上の

会員は会費を免除する。